

73円を盗難にあった四配（孔子の弟子である孟子、顔子、曾子、子思）像の復元費用に利用している。（丙53、丙54）

また、同寄附金のうち、243万9910円を聖廟積菜用具購入費用に利用し、42万円を聖廟積菜用籠旗購入に利用している（丙53）。

さらに、多久聖廟創建300年に合わせて寄附を募った結果、378万2003円が多久市に寄贈され、多久市は、これも孔子像修復および四配の像復元に活用している（丙53）。

(6) 賽銭箱やおまもり等について

多久聖廟（孔子廟）の前には、賽銭箱が設置され、廟の構内で、おみくじやお守り、絵馬が販売されている（丙84）。廟の入り口には、絵馬やおみくじを結びつける場所もある。おみくじやお守り、絵馬は、多久市物産館（朋来庵）でも、同じものが販売されている（丙84）。

これらのおみくじ、お守り、絵馬は、多久市が多久市物産館（朋来庵）の指定管理者として指定している多久市観光協会が販売している（丙84）。

(7) 多久聖廟における孔子廟の捉え方

多久聖廟は、(1)で述べたとおり、多久領を治めていた多久氏の多久茂文が建てたものである。その建てられた経緯については、多久茂文が、多久領が財政的に恵まれておらず、領民の心が荒んでいたことを案じ、多久領を治めるために教育が必要と考え、学校と聖廟の建設を願望し、東原庠舎と多久聖廟を建設したとされている（丙33）。

また、多久茂文は、「文廟記」という書物を残しており、そこには、中国で学問が盛んな理由に聖廟があること、江戸に湯島聖堂ができて、学問・武芸・芸術が盛んになったことを理由に、多久聖廟が建てられた経緯が記載されている（丙33）。具体的には、学校の隣に、学問の振興に重大な功績を残した孔子の像を置き、それを見て、人々が学問をする契機にするために、孔子廟を建設したと考えられている（丙33）。

このように、多久聖廟では、孔子廟は、学問等の振興のために建てられたものであり、宗教の信仰のために建てられたとはとらえられていない。

(8) 小括

多久聖廟では、(2)で上述したとおり、公共団体である多久市が、孔子廟を所有しており、その敷地も公共団体である国が所有している。そして、(2)ないし(5)で上述したとおり、孔子廟の管理・運営等や、釈菜のために、市が公金を支出したり、市が釈菜に積極的に関わったりしている。

このように、市と孔子廟が深くかかわっているのは、孔子廟はそもそも儒学という学問の振興のために建てられたものであり、「超自然的、超人間の本質の存在を確信し、畏敬崇拜する心情と行為」との「宗教」とはかけ離れたもので、政教分離の問題が生じないと考えられているからである。

また、市が釈菜に積極的に関わっているのも、釈菜が、学問の振興に寄与した実在する人物たる孔子についての伝統的行事として、学問の振興や、多久市の歴史・文化のアピールのために行われるものすぎないため、「宗教」の信仰、礼拝、普及等を行っているものではなく、「宗教的活動」ではないからである。

そのため、市と孔子廟・釈菜との関わりは、「宗教」に対する援助、助長、促進又は圧迫、干渉等とはならず、「宗教」と公共団体とのかかわり合いが相当とされる限度を超えることはないため、政教分離原則に反することはなく、多久市の上記の活動につながっているものである。

また、(4)のとおり、釈菜のパンフレットには、孔子が「学問の神」と記載されていたり、釈菜の際に「送神」や「迎神」という言葉が使われたりしており、賽銭箱があり、おみくじ、お守り、絵馬等が販売されている。しかし、それにもかかわらず、多久市が上記の活動をしていることは、そのような形式が重要なのではないことを示している。

多久聖廟でも、本件施設でも、その地の歴史・文化を保存し、儒学という

「学問」をきっかけに、文化・教育の発展や観光等の振興を図るための活動がおこなわれており、それゆえ、公共団体がこれを支援しているにすぎないのであり、政教分離に反することはない。

「神」という言葉は、文化・歴史を保存・復原した結果、形式的に残っているにすぎないし、賽銭箱やおみくじ、お守り、絵馬等は、学問や観光の振興を図るために、売られているにすぎない。

## 2 足利学校について

### (1) 概要

足利学校は、栃木県足利市にあるが、その敷地の中心付近には、孔子廟がある（丙55）。足利学校敷地内には、孔子廟のほか、旧遺跡図書館（書物を継承するために建てられた図書館）や、方丈（学生の講義、学習、学校行事等のために使用されていた建物を復原したもの）、書院（席主（学長）の書齋で、個人教授が行われた場所を復原したもの）、衆寮（学生寮を復原したもの）などが存在する（丙55、丙56、丙85、丙86）。

孔子廟の中には、孔子坐像と小野篁（おののたかむら）像（足利学校の創始者と伝えられている（諸説ある））が置かれている（丙55、丙56、丙85、丙86）。

### (2) 土地・建物の所有者・管理運営者について

足利学校の敷地は全て足利市が所有しており（丙57の1ないし丙58の8）、孔子廟や旧遺跡図書館、方丈等も足利市が所有している。そして、孔子廟も含め、足利学校の管理運営は、足利市教育委員会の所管となっており、足利市教育委員会事務局内の「史跡足利学校事務所」が、管理運営をしている（丙59、丙60）。

また、足利市でも、1の(5)で述べたふるさと納税制度による寄附金を募集し、足利学校の改修費などに利用している（丙61）。

### (3) 釋奠祭禮について

足利学校においては、本件施設における釋奠祭禮に相当する行事として、毎年11月23日に、釋奠が行われている（丙62）。

釋奠では、本件施設での釋奠祭禮と同様に、式次第において「迎神」や「送神」などの言葉が使われ、供物をするなどする。そのほか、香を焚いたり、雅楽の演奏を行ったりする（丙62、丙64、丙86）。

現在では、史跡足利学校釋奠保存委員会が組織され、同委員会が釈菜を主催しているが、同委員会には、足利市教育委員が含まれている（丙63）。

釋奠においては、本件施設での釋奠祭禮と異なり、孔子廟の中で式典に立ち会う役割を担う「立会人」がいるが、この立会人は、足利市長、市議会議長、市議会副議長、足利市副市長、足利市教育長などが務めている（丙64）。

#### (4) 足利学校における孔子廟の捉え方

##### ア 学問の振興の意義

足利学校は、中国古典を学ぶ学校であり、儒学を中心に学問の発展の拠点とされていた（丙66）。そして、孔子廟の建築や釋奠の挙行も、中国古典を学ぶという意味での「儒学」への熱意の表れとされており（丙66）、「宗教」ではなく、「実学」としての学問のために行われている。さらに、現在では、足利学校の文化・歴史を全国に発信するため、釋奠が行われている。

このように、儒学は宗教ではなく、学問であるからこそ、足利市自身が孔子廟を管理・運営し、委員会を組織しつつ、釋奠祭禮を行っている。このことは、足利市の制定している足利市民憲章において、足利市を「学問のまち」とし、「一、足利市は日本最古の学校のあるまちです。」として足利学校を取り上げていることからもうかがえる（丙56）。

##### イ 論語の位置づけについて

足利学校では、「史跡足利学校論語素読委員会」により論語の素読の学習講座が行われており、足利市教育長が同委員会の副委員長を務めている（丙

6)。さらに、足利市教育委員会が「論語抄 史跡足利学校」を編集・発行している（丙68）

これらは、論語を含む儒学が宗教ではなく、学問であることから、市が論語学習の推進事業に関わっているものである。

さらに、足利市の街角には、足利市産業観光部商号観光課が設置した案内板があり、そこには、足利市出身の相田みつを氏のことばとともに、論語の書が記載されている（丙69）。このことから、儒学の一つである論語は、宗教ではなく、「地域に縁のあることば」や「その地域の歴史・文化を感じるためのことば」として捉えられていることが分かる。

#### ウ 教育の場、生涯学習の場としての意義

さらに、孔子廟を含む足利学校は、教育の原点とされ、市民の生涯学習の場としての役割も果たしている（丙56）。具体的には、足利市でも、本件施設の明倫堂における講座と同様に、教養講座が開かれており、学問としての儒学を中心に、漢詩の作り方や歴史書の読解講座、歴史講座等が開かれている（丙70）。

#### (5) お守りなどについて

足利市観光協会が運営する太平記館にて、孔子廟のお守りや絵馬が販売されている（丙86）。

#### (6) まとめ

足利学校では、(2)で述べたとおり、公共団体である足利市が、孔子廟やその敷地を所有し、自らが管理・運営しているが、その理由は、(4)で述べたとおり、儒学が宗教ではなく学問であるからである。

さらに、(3)で述べたとおり、釋奠に、足利市長、副市長、教育長などが、立会人となっているのも、釋奠が、宗教行事ではなく、中国古典を学ぶという意味での「儒学」という学問への熱意の表れであり、その土地の文化・歴史を全国に発信するためのもの伝統行事であるからである。